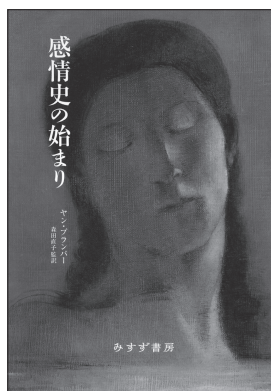


ヤン・プランパー 著

森田 直子 監訳

## 感情史の始まり

紹介者 美那川 雄一



みすず書房

2020年11月

四六判

608ページ

本体 6,300円

## 目次

- 序論 歴史と感情
- 第1章 感情史の歴史
- 第2章 社会構築主義——人類学
- 第3章 普遍主義——生命科学
- 第4章 感情史の展望
- 結論
- 謝辞
- 訳者あとがき
- 用語解説
- 原注
- 主要文献目録
- 索引

近年、歴史教育の世界ではエンパシー(感情理解)という言葉を耳にする。バートンとレヴスティックは、「ケアリングとしてのエンパシー」が民主主義社会における歴史学習の最終目的となるべきだと主張している。私たちは過去の人々の感情にどこまでせまることができるのであろうか。

プランパーは、序論で歴史と感情について取り上げ、まずは哲学的な切り口から感情について議論を始める。それから第1章で感情史の歴史を説明する。彼はアナル学派のフェーブルを感情史の始まりと位置づけ、フェーブル以前から20世紀までの歴史家たちの感情の扱い方について概観する。しかし、つづいてプランパーは感情史の転機を2001年9月11日におく。9.11は、米国内外を問わず、きわめて感情的なコミュニケーションの大津波を引き起こした。そして、進行しつつあった脱言語論的転回を加速させ、一方ではバイオ革命を加速させ、自由意志や「私」、感情といった従来人文科学が扱ってきた概念については、生命科学が研究対象とするようになった。そして、このなかで感情をめぐる社会構築主義と普遍主義の二項対立が生まれたとする。

第2章では、人類学の影響を強く受ける感情史の社会構築主義的なアプローチを説明する。人類学では、感情は時代や文化の影響を受けて社会的に構築されていくという考え方をとる。つまり、感情とは、時代によっても、場所によっても異なるため、この立場をとると、私たちはナポレオンの怒りや喜びを理解することは容易ではなくなる。

第3章では、心理学、認知科学、神経科学や脳科学にもとづく立場から感情をとらえる普遍主義的なアプローチが紹介される。興味深いのは、脳の部位とその機能を図示し、脳科学的な視点から感情研究について言及している点である。また、その一方で、15世紀フランドル絵画「十字架降架」を取り上げ、その描かれた人物たちの身体表現から私たちが感情を読み取っていることについても語っている。

第4章と終章では、社会構築主義と普遍主義の対立を架橋する構想を提案する。感情の歴史学には、生命科学、社会科学そして人文科学の学際的な研究が求められており、これにより文化と自然の二項対立を抜け出すことを主張している。歴史は「文系」科目という学校固有の言説が消える日も遠くはないことを実感する一冊である。

(みながわ・ゆういち／静岡県立小山高等学校教諭)